

## 日英語の主格素性の照合について：随意的か義務的吗

野 地 美 幸\*

(平成13年7月18日受理)

### 要 旨

日英語の主格素性の照合(主格付与)に関する違いとしてまず注目されるのは、日本語では「太郎が足が長い」や「魚が鯛がうまい」といった多重主語構文が可能であるということである。この事実から、英語では単一の節内で主格照合は一度だけ可能であるのに対して日本語では複数回起こりうると言える。本稿では、これが主格照合に関する唯一の違いではなくて、主格素性の照合が英語では義務的であるのに対して日本語は随意的であるという違いもあることを主張する。これによって、英語には見られない格の交替が日本語で可能となることが説明される。

### KEY WORDS

日本語 Japanese      英語 English      主格照合 Nominative Checking  
随意性 Optionality      義務性 Obligatoriness

### 1. 主格照合のメカニズム

議論に先立ちまず、主格素性の照合がどのように行われるかを明らかにしておく必要があるであろう。Chomsky (1995) 第4章によれば、(1)の文は(2)のように分析される。

(1) John read the book.

(2) [<sub>TP</sub>John<sub>i</sub>T [<sub>VP</sub><sub>i</sub> read-*v* [<sub>VP</sub><sub>i</sub> the book]]]

主格素性を持った John(DP)は *v*P の指定部の位置に併合(merge)され(VP 内主語仮説)、TP の指定部へ顕在的に(overtly)移動する。この移動は T に含まれる強い EPP 素性(D 素性)により駆動される。John は、同じ主格素性を持った T と指定部-主要部の関係を成立させることにより、格素性の照合を行う。時制節の T は主格素性を持っているので、この場合適切に照合され、格素性は解釈不可能な素性であるので照合後は削除される。John の格素性が主格以外であった場合には、T の格素性との間で不適合(mismatch)が生じ、派生が破棄(cancel)される。

日本語の場合を考えてみよう。Takezawa(1987)、竹沢(1998)は日本語でも英語と同様に INFL(=T)が主格付与能力を持っているとしている。その根拠として、まず次のような例を挙げている：

(3) a. 太郎は [花子の大学合格がとてもうれしいと] 思っている。

b. 太郎は [花子の大学合格 {\*が/を} とてもうれしく] 思っている。

(4) a. 太郎は [花子の馴れ馴れしい態度がとても不快だと] 思っている。

---

\* 言語系教育講座

b. 太郎は [花子の馴れ馴れしい態度 {\*が／を} ととても不快に] 思っている。

(5) a. 太郎は [花子の横顔がとても美しいと] 思った。

b. 太郎は [花子の横顔 {\*が／を} ととても美しく] 思った。

日本語の「思う」は英語の believe タイプと同様に時制節と非時制節の両方を補部として取ることができるが、「うれしく」「不快に」「美しく」のように述語が連用形で終わっている非時制節の場合「が」は不可能である。

また「させる」「もらう」のような動詞は非時制節のみを取る動詞であるが、(6, 7)が示しているように補文の主語は「が」格ではなく「に」格になっている：

(6) a. 花子が寿司を食べる。

b. 太郎は [花子 {\*が／に} 寿司を食べ] させた。

(7) a. 花子が本を読む。

b. 太郎は [花子 {\*が／に} 本を読んで] もらった。

これらの事実は時制の有無が「が」格を決定していることを示しており、日本語でも、T が [+Tense] の指定を受けている場合に主格照合能力を持つと言える。

Kuroda(1988)は、(8)のような与格主語構文が可能であることから、日本語は INFL の指定部で主格名詞句が認可される英語とは異なる、したがって INFL は主格付与子ではないと結論づけている。

(8) a. 太郎に数学がわかる。

b. 先生に数学がおわかりになる。

c. 太郎に自分がわからない。

この構文で主語の機能を果たしているのは与格名詞句であって主格名詞句ではない。これは、与格名詞句が「お～になる」のような尊敬表現で受けられること((8b)), そして主語指向性を示す「自分」の先行詞になりうること((8c))から、明らかである。

しかしながら、与格主語構文で主格名詞句が主語の機能を果たしていないからといって上記のように結論づけるのは早計である。次の文を考えてみよう。

(9) a. 私達は太郎に数学がわかりやすいと思った。

b. \*私達は太郎に数学がわかりやすく思った。

(9)は、(8a)の文を(非時制節にするために)繰り上げ述語「やすい」に埋め込み、さらに「思う」の補文として埋め込んだものである。「が」格が容認可能となるのは「思う」の補文が時制節の場合((9a))であって、非時制節の場合((9b))は許されない。「やすい」は格素性を欠く動詞なので「が」格の認可には関与しない。したがって(9a, b)の対立は、主格名詞句の格照合にはやはり時制の有無が関わっていることを示している。

問題は、日本語で主格名詞句と時制要素 T との間の格照合がどのように行われるのかである。まず最初の問題を検討してみよう。Ura(2000)は Chomsky(1995)のミニマリスト・プログラムの想定に基づいて(6a), (7a)のような文の構造を(10a)のように、そして(8a)のような与格主語構文の構造を(10b)のように分析している。

(10) a.  $[_{TP}DP(Nom)_i[_{vP}t_i[_{VP}DP(Acc)V]v]T]$

b.  $[_{TP}DP(Dat)_i[_{vP}t_i[_{VP}DP(Nom)V]v]T]$

(10a)の主格名詞句は、(2)の英語の場合と同様に、 $vP$  の指定部へ併合され T の指定部へ顕在的に移動し、主格素性は T と指定部-主要部の関係に基づいて照合される。与格主語構文(10b)で

は、与格名詞句が vP の指定部へ併合され、この位置で内在格(与格)の照合が行われる。そしてさらに TP の指定部へ移動し、T と D 素性、 $\phi$  素性の照合を行うことにより、「主語」としての機能を得る。一方主格名詞句は V の補部位置に併合され、LF で主格素性を含む形式素性(formal feature)が T へ付加し、主要部-主要部の関係に基づき照合が行われる。Chomsky(2000, 2001)のミニマリスト・プログラムの「修正」に従えば素性の移動が LF で起こることはないで、(10b)の主格名詞句は V の補部位置で T と一致を行なう(Agree)ことにより格を照合する、とも言える。いずれにせよこうした分析を採用すれば、与格主語構文のように主格名詞句が主語以外の場合にも時制節の T がその格照合に関わることが説明可能となる。

Chomsky(2000, 2001)は、構造格を一致の結果として生じるものと見なし、名詞句がどんな格で実現するかはどのような要素と一致を行なったかによるのであって、T 自体に格素性は存在しないと主張している。しかし、(10)でみたように与格主語構文内の主格名詞句は T と格素性の照合のみを行なっているので、格素性の照合が一致によって行われる限り、そして一致が(同一ではないにせよ)同種の素性間で行われる以上(Chomsky(2001:6))、T も格素性を持つと考えられる。

これまでの議論を通して、日本語でも T が主格名詞句の格照合を行っていることを改めて確認したことになるが、後の議論と関連する多重主語構文の場合はどうかを検討しておこう。日本語の多重主語構文には次の2つのタイプが存在する：

- (11) a. 太郎が性格が悪い。  
b. 魚が鯛がうまい。

(11a)の「太郎が性格が」の部分は「太郎の性格が」で置き換え可能なのに対して、(11b)の主格名詞句間に「の」で結ばれる関係は成立していない。つまり、(11a)の主格名詞句は全体で「悪い」という述語の項とみなせるが、(11b)の2つの主格名詞句は別々の意味役割を担っている。(11a)のタイプと(11b)のタイプとでは許容される主格名詞句の数も異なる。前者は3つ以上可能であるが後者は2つまでである(Tateishi(1994))。

(11a, b)のそれぞれの主格名詞句の構造上の位置に関しては、これまで様々な立場から様々な提案がなされており、ここで立ち入って議論することはせずに、複数の主格名詞句の認可と時制との関わりについてのみ明らかにしておこう。(11)の文を「思う」の補文として埋め込むと次のような文が得られる：

- (12) a. 私は太郎が性格が悪いと思う。  
b. \*私は太郎が性格が悪く思う。  
c. 私は太郎の性格を悪く思う。  
(13) a. 私は魚が鯛がうまいと思う。  
b. \*私は魚が鯛がうまく思う。  
c. 私は { \*魚を鯛を / 魚の中では鯛を } うまく思う。

(12a, 13a)のように時制節のまま埋め込んだ場合は容認可能であるが、(12b, 13b)のように非時制節にして埋め込んだ場合は非文となる。(11a)のタイプは「～が～が」のパターンではなく「太郎の性格を」にすれば良くなるが((12c))、(11b)のタイプは「を」格の連続は許されず「魚の中では鯛を」のように言い替えなければならない((13c))。(12, 13)から、多重主語構文の主格照合に関しても時制が関わっている、もっと言えば多重主語構文では単一の T が複数の主格名詞句の格照合に関与している、と言える。

## 2. 英語の主格照合

前節では、(i)英語と日本語は共に T が主格照合を行っているということ、そして(ii) T が英語では1つの、日本語では1つ(以上)の、主格名詞句の格照合に関わるということ、を考察した。そうすると、日英語の相違点は単一の T が複数の主格名詞句と照合を行いうるかかどうかということになるが、主格照合に関する違いはそれだけであろうか。まず本節では英語の主格照合に関して更に詳しく検討してみよう。

Chomsky(1995)の枠組みでは、詳しい議論はなされていないものの、英語では T の格素性が時制素性[+Tense]と共に必ず存在すると仮定する必要がある。まず、(14)を考えてみよう：

- (14) a. Mary considers him to be honest.  
b. \*Mary considers him is honest.

(14)は例外的格付と構文であるが、埋め込み文が非時制節の場合((14a))主語名詞句の対格素性は主節の動詞により照合される<sup>3)</sup>。時制節で主格素性の照合が随意的であるとすると、埋め込み文の主語は非時制節の場合と同様に主節動詞による格照合が可能なので、(14b)のような文が可能であると誤って予測してしまう<sup>4)</sup>。

(15)のような文も、英語では T による主格照合が義務的であることを示す証拠となる：

- (15) \*John<sub>i</sub> seems<sub>[TP t<sub>i</sub> is happy]</sub>

時制節の主語位置で格照合が随意的だとすると、John は主節か埋め込み文のどちらか一方の主語位置で格照合が行われれば良いことになり、(15)のような文を排除できない。しかし、英語の時制節の T が必ず格素性を含んでいると仮定すれば、主節の T の格素性が照合されずに残るので、(15)は非文として適切に排除される。

ここで問題となるのは(16a)のような文主語構文である：

- (16) a. That the earth is round is surprising.  
b. It is surprising that the earth is round.

文主語構文では名詞句ではなく節が主語となっているため、(15a)の主節の主語位置では格照合が行われていない、つまり T が格素性を含んでいない、ように見える。しかしながら実は文主語は、格が照合される位置にしか現われないという意味で、名詞句と同じ分布を示す。例えば、Bošković(1995)が指摘しているように、文主語は繰り上げに従う：

- (17) a. It seems to be true [that John passed the exam].  
b. \*It seems [that John passed the exam] to be true.  
c. [That John passed the exam] seems to be true.

(17b)のように文主語が非時制節の主語位置に生起することはない。

野地(1997)は文主語の話題要素的側面をも考慮して(16a)を次のように分析している：

- (18) [<sub>TP</sub> [<sub>CP</sub> That the earth is round] [<sub>TP</sub> pro<sub>i</sub> [<sub>T</sub> is] [<sub>VP</sub> t<sub>i</sub> surprising]]

ここで T は D 素性と主格素性そして話題素性を持つと想定する。文主語構文内には pro が存在し、TP の指定部へ移動することにより T の D 素性と格素性を照合する。that 節は T の外側の指定部へ併合され T の話題素性を照合する。文主語が格位置にしか生じないということは、文主語構文内に pro を仮定することにより説明される。

Bošković(1995)は節も格を担いうるという想定で(16)を説明する<sup>5)</sup>。文主語構文の分析とし

てどちらを取るかの議論はさておき、ここで重要なのは、一見主格照合が行われていないように見える文主語構文においても T は照合すべき主格素性を持っているということである。したがって英語の時制節の T は必ず主格照合を行うと結論づけてよいであろう。

### 3. 日本語の主格照合

日本語が、英語と同様に、時制節の T により主格照合を行っているということは 1 節で見たが、本節ではその格照合が英語のように義務的なのかどうかを検討する。Kaneko(1988)は日本語と英語の ECM 構文の比較を基に、日本語(のような pro 落とし言語)では主格付与が随意的である可能性を示唆している。一方、Shibatani(1977), Takezawa(1987), Ura(2000)等は与格構文を基に、日本語の主格照合が義務的であるという趣旨の議論を行っている。

#### 3. 1. ECM 構文

まず、ECM 構文を考えてみよう。(19)のように埋め込み文が非時制節の場合は「を」格のみが可能であるのに対して、(20)のように埋め込み文が時制節の場合には「が」格と並んで「を」格も可能である(cf.(14)):

- (19) a. \*太郎は花子の大学合格がとてもうれしく思っている。  
 b. 太郎は花子の大学合格をととてもうれしく思っている。  
 (20) a. 太郎は花子の大学合格がとてもうれしいと思っている。  
 b. 太郎は花子の大学合格をととてもうれしいと思っている。

(19a)は、前に見たように、非時制節の T に照合すべき主格素性が含まれていないことから導き出される当然の結果と言える。(20b)は、英語と同様日本語でも時制節の T による格照合が義務的であるならば非文となるはずである。しかしながら ECM 構文の補部節が時制節であっても「が」格と並んで「を」格も可能である。Kaneko(1988)はまさにこの(20)の事実に基づいて、日本語は T による格付与が随意的であるという示唆を行っている。

ただしこの議論が成り立つのは、Kuno(1976)に従って(20b)が(21)のような構造を持つと仮定した場合であることに注意しなければならない。

- (21) 太郎は [花子の大学合格を]<sub>i</sub> [とてもうれしいと] 思っている

ここで、埋め込み文の主語は主節へと移動し、主節の動詞により格照合される<sup>6)</sup>。したがって、埋め込み文の主語位置には痕跡が残される。では(21)の構造ではなく、例えば Mihara(1994)が提案している(22)のような構造を仮定したらどうなるであろうか。

- (22) 太郎は [花子の大学合格を]<sub>i</sub> [pro<sub>i</sub>とてもうれしいと] 思っている

「花子の大学合格を」は付加部(adjunct)として主節内に生成され、補文の主語(pro)をコントロールする。(22)のように補文の主語位置に pro が生起しているとする、その pro が T と格照合を行っていると考えられる。したがって、日本語で T による格照合が随意的であると結論づけるためには(22)の可能性を排除しなければならない。

Mihara は Kuno(1976)の分析の代案として(22)を提示しているのであるが、(21)の分析の問題点として、(23)に示すように「を」は口語体で脱落しうが ECM 構文の対格名詞句の「を」は脱落しえないことを指摘している<sup>7)</sup>。

- (23) 太郎が本(を)買ったよ。

Mihara はこの事実を基に ECM 構文の「を」は構造格を実現したものではなくて後置詞であると主張し、「を」句を主節の要素と見なし、埋め込み文の主語位置には pro を仮定する。しかし、ECM 構文の「を」が脱落しないからといって後置詞であるとは言い難い<sup>9)</sup>。というのは、一般に後置詞句内の名詞と遊離数量詞を関係付けることは不可能であるが((24)), ECM 構文の「を」句と遊離数量詞の関係付けは可能である((25))からである:

- (24) a. 私は 3 人の女性から花束をもらった。  
 b. \*私は女性から 3 人花束をもらった。  
 (25) a. 私は 2 枚の風景画が素晴らしいと思った。  
 b. 私は風景画を 2 枚素晴らしいと思った。

では「を」句を名詞句とし(例えば「思う」の項とみなし)た上で(19b)を(22)のように分析する可能性は考えられるであろうか。次のような文は一見そのような分析が正しいことを示しているように見える:

- (26) a. ぼくは大阪を[食べ物がうまい]と思う。  
 b. ぼくは太郎を[性格が悪い]と思う。

埋め込み文内には「が」格名詞句(主語)が生起しているが、そうした場合でも「を」格名詞句が可能だからである。しかしながら、(27)の文との比較から明らかなように、(26)の「を」格名詞句は最初から主節内に存在する要素ではなくて埋め込み文の要素だったと考える方が妥当であろう。

- (27) a. ぼくは[大阪が食べ物がうまい]と思う。  
 b. ぼくは[太郎が性格が悪い]と思う。

実際、(22)を提案する Mihara (1994) も ECM 構文の「を」句は補部節と‘aboutness relation’で結びついていると述べており、(22)のような構造を仮定したとしても「を」句の解釈は埋め込み文内で決まることを暗に認めていることになる。したがって(26)は(22)を裏付ける証拠にはならない。

むしろ、(26)のような文は、ECM 構文で「を」格名詞句の移動があるとする(21)の分析を仮定することにより、自然な説明が与えられる:

- (28) a. ぼくは[大阪を]<sub>i</sub> [食べ物がうまい]と思う。  
 b. ぼくは[太郎を]<sub>i</sub> [性格が悪い]と思う。

ここで埋め込み文の T は「が」格名詞句とのみ格照合を行う。「を」格名詞句は主節の対格照合の行われる位置へと移動する。この移動により(27)との対応関係が捉えられる。(29)の対立は、(28)で「を」格名詞句の移動が起こっていることを示している:

- (29) a. ぼくは太郎を(心から)性格が悪いと思う。  
 b. ぼくは太郎が(\*心から)性格が悪いと思う。

主節の副詞「心から」は、「を」格名詞句に後続することはあっても((29a)), 「が」格名詞句に後続することはない((29b))。これは、(29b)の「が」格名詞句が埋め込み文内で格を照合せず主節へ移動したとしても、動詞の格素性は対格であるため素性の不適合が生じるからである。

(22)の分析を支持するかのように見える(26)が(21)の分析の下でうまく説明されることを見たが、次に(21)を積極的に支持する、したがって(22)の分析にとって問題となる、現象を見てみよう。まず第一に、日本語には「雲行きが怪しい」、「隣の芝生は青く見える」という慣用句があるが、これを基にした次のような表現が可能である<sup>9)</sup>。

(30) a. 私はその交渉の雲行きを怪しいと思った。

b. 私は口を禍のもとだと思う。

ここで「を」格名詞句は慣用句の一部であるので、もともと埋め込み文の主語であることは明らかである。(30)のような文が原則として可能であるということは、ECM 構文の「を」格名詞句はもともと埋め込み文内の要素であることを示唆している。

また、Sakai(1996)は、疑問詞が「も」によってc統御されると英語の any に相当する否定極性項目として解釈されること((31))に着目し、(32)が容認可能であるという事実に基づいてECM 構文の対格名詞句はもともと補部節内の要素であると結論づけている：

(31) a. 和子が誰が頼りになるとも思っていない。

b. \*誰が[和子が頼りになるとも]思っていない。

(32) 和子が誰を頼りになるとも思っていない。

このテストを多重主語構文に適用すると(33a)(34a)のような文が得られるが、最初の「が」格名詞句を「を」格に変えても容認度に差は生じない<sup>10)</sup>：

(33) a. ?ぼくはどの地域が食べ物がうまいとも思わない。

b. ?ぼくはどの地域を食べ物がうまいとも思わない。

(34) a. ?ぼくはどの学生が性格が悪いとも思わない。

b. ?ぼくはどの学生を性格が悪いとも思わない。

つまり、(33b)(34b)は(26)のようなECM 構文の「を」格名詞句のもとの位置も埋め込み文内にあることを示唆している。

したがって、(20b)(26)のECM 構文の対格名詞句はもともと埋め込み文内の要素であると結論づける経験的裏付けが得られたことになる。しかし、(20b)(26)のECM 構文の構造がそれぞれ(21)(28)であると結論を下す前に考慮すべき事実が残っている。Homma(1998)は(20b)のタイプのECM 構文に関して対格名詞句はもともと補文節内にあるとしながらもなお(20a)の埋め込み文の主語と同じとは考えにくい現象があることを指摘している。(35a)は二様に曖昧で、「全て」が「ない」よりも広い作用域をとる全否定の読みと「ない」が「全て」よりも広い作用域をとる部分否定の読みが可能であるのに対して、(35b)は部分否定の読みを持たない：

(35) a. 卓也は全ての時計が正確ではないと思っている。(全て>ない, ない>全て)

b. 卓也は全ての時計を正確ではないと思っている。(全て>ない, \*ない>全て)

作用域が Aoun and Li(1989, 1993)等で提案されている作用域の原理(36)によって決定されたとすると、(35b)の「全ての時計を」は派生のどの段階を通じても「ない」によってc統御されることはないことになる：

(36) 数量詞 A が数量詞 B より広い作用域をとるのは A が B を含む連鎖の要素を c 統御する場合かつその場合のみである。

しかしながらこれに関しては(36)は必要条件であって十分条件ではないと考えたい<sup>11)</sup>。(35b)と(37)を比較してみよう：

(37) 卓也は全ての時計を正確ではなく思っている。(全て>ない, ?ない>全て)

埋め込み文が非時制文である(37)の場合(全否定の読みが優勢ではあるが)部分否定の読みも可能である。(35b)と(37)の違いは時制の有無である。そこでここでは時制の有無も数量詞の作用域の決定にかかわると仮定する。したがって必ずしも(35b)の事実が(21)の分析を否定するものではない。(35)に関しては、こうした議論が基本的に正しい方向にあるということを再度後

で立ち戻って眺めてみたい。

以上の考察から、時制節を補部節とする ECM 構文のうち(20b)の構造は(21)であり、(26)の構造は(28)であると結論づけることができる。よって、(20b)のような ECM 構文での「が」格名詞句の欠如は、日本語の時制節で T による格照合が随意的であることを意味する。

### 3. 2. 与格主語構文

前節では ECM 構文を通して日本語の主格照合が随意的に行われていることを見たが、本節ではこれとは反対の主張を行っている Ura(2000)等の議論を取り上げて検討する。

Ura(2000)は次のような与格主語構文を基に日本語の時制文で主格照合は義務的であると主張している：

- (38) a. 良介に英語ができる。  
       b. 良介が英語ができる。  
 (39) a. 良介に英語が話せる。  
       b. 良介が英語が話せる。  
       c. 良介が英語を話せる。  
       d. \*良介に英語を話せる。

与格主語構文は一般に状態を表わす述語の場合に可能であるが、「できる」のように単一の述語の場合と「話せる」のように可能の-(ra)r)e と共に複合述語を形成している場合とがある<sup>12)</sup>。与格主語構文(38a),(39a)は「～に～が」のパターンを示すが、(38b),(39b)が示しているように「～が～が」の多重主語構文のパターンも可能である。また複合述語の場合、-(ra)r)e と結び付いている述語が他動詞であればさらに「～が～を」のパターンも可能となる((39c))。しかしながら「～に～を」のパターンは存在しない((39d))。

Ura(2000)は、与格主語構文内の主格目的語は「できる」の場合も「話せる」の場合も述語はその格照合に参与しないという想定で T と格照合を行うとしているが(1 節を参照)、(39d)の非文法性を説明するため、時制文の T は主格素性を必ず含んでいると主張する。「話せる」の目的語は「が」格の場合((39b))と「を」格の場合((39c))があるが、(39d)で「を」格が許されないのは T 内の格素性が照合されないで残るからだとしている。

この説明は、自動詞が -(ra)r)e と結び付いた場合にも当てはまる<sup>13)</sup>：

- (40) a. 良介が歩ける。  
       b. \*良介に歩ける。

「歩ける」の主語「良介」は「が」格でなければならない。ここで「が」格が「に」格より優先されるのは、(39d)で「が」格が「を」格より優先されるのと同じ理由、つまり時制文で主格照合が義務的であるという理由、によるというのである。

しかし、(38)～(40)の資料から得られる一般化というのは(41a)ではなくて正確には(41b)であるように思われる：

- (41) a. 時制文では「が」格の名詞句が必ず存在しなければならない。  
       b. 与格主語が可能なのは他動詞が対格目的語を取らない場合である。

(41b)に沿って説明すると、(38)の「できる」は目的語を取るという意味では他動詞であるが、対格照合を行えない。したがって対格目的語を取り得ない。(39)の「話せる」は他動詞で「を」格目的語を取らない場合にのみ与格構文が可能となっている。また、(40)の「歩ける」はそも



そも自動詞なので目的語を取らない。

(41)のどちらの一般化が正しいかを判断するため非時制文に直した場合について考えてみよう。Ura(2000)のように(41a)を前提として時制節のTによる格照合が義務的であるとすると、非時制文でTに照合されるべき主格素性がない場合には(39d)や(40b)のパターンが可能であることを予測する。しかし、これは事実と反する<sup>14)</sup>：

- (42) a. [良介に英語が話せないと]思われている。  
 b. \*[良介に英語を話せなく]思われている。  
 (43) a. \*[良介に歩けないと]思われている。  
 b. \*[良介に歩けなく]思われている。

まず対格照合を行いうる他動詞の場合、(42b)のように「話せなく」という連用形にしても「～に～を」のパターンは不可である。また、(43b)の自動詞の場合にも与格主語が許されないという状況に変わりはない。一方(41b)の一般化はここでも当てはまる。したがって(41b)が正しい一般化と言えるであろう。

ではここで(41b)の一般化を導き出す方法を示唆してみたい。(41b)は、-(ra)r)eが対格素性を吸収するというKoizumi(1994), Ura(2000)等の仮定に、対格を吸収した場合にのみ与格を照合するという仮定を付け加えることによって、説明できるのではないだろうか。つまり、(39d, 42b)で「～に～を」のパターンが許されないのは、-(ra)r)eが対格を吸収していないので与格照合も行えないからと考えられる。また(40b, 43b)で与格主語が許されないのは-(ra)r)eが対格を吸収していないからと解釈できる。

ここまでの議論を通して、(39d, 40b)のような与格構文を基に時制節のTによる格照合が義務的であるとは言えないということを示した。次に、この結論を裏付ける積極的な証拠として長距離格付与と呼ばれる現象を見てみよう：

- (44) a. 和子は[子供に(は)そうした生活上の指導が必要だと]感じた。  
 b. 和子は[子供に(は)そうした生活上の指導を必要だと]感じた。  
 cf. \*子供に(は)そうした生活上の指導を必要だ。

与格構文をECM動詞の補部として埋め込むと、述語の主題(theme)に相当する名詞句(ここでは「そうした生活上の指導」)は「が」格の場合((44a))と「を」格の場合((44b))がありうる。

「が」格は前に見たようにTと格照合が行われるからであるが、「を」格は主節の動詞「感じた」との間で格照合が行われるからである。これは(44b)の与格構文が独立した形では(「感じた」の補部として埋め込まなければ)非文となることから明らかである。したがって、与格構文であっても主格照合は随意的であると考えられる。

(44b)の例文は、主節の動詞が埋め込み文内の要素と格照合を行っており、まさにECM構文の一種と言える。そこでECM構文を(21)と分析する際に問題となった数量詞と否定辞の作用域の問題を再度取り上げてみよう。

- (21) 太郎は[花子の大学合格を]<sub>i</sub> [たとえもうれしいと] 思っている。  
 (35)で見たように、埋め込み文の主語が「が」格から「を」格に変わると(否定辞が広い作用域をとる)部分否定の読みが無くなるというのが(21)の問題点として挙がっていた：  
 (35) a. 卓也は全ての時計が正確ではないと思っている。(全て>ない, ない>全て)  
 b. 卓也は全ての時計を正確ではないと思っている。(全て>ない, \*ない>全て)

これに関しては、部分否定の読みが無くなるのが即「が」格の場合と「を」格の場合とで生

起する位置が異なることを意味するわけではなく、数量詞の解釈に時制の有無が関わるからだという主張を行なった。では(44b)のような ECM 構文に数量詞と否定辞を埋め込んだ場合はどうであろうか：

(45) a. 和子は〔子供に(は)全ての生活上の指導が必要ではないと〕感じた。

(全て>ない, ない>全て)

b. 和子は〔子供に(は)全ての生活上の指導を必要ではないと〕感じた。

(全て>ない, \*ない>全て)

この種の ECM 構文には顕在的移動が関与していない、つまり(45a)の「が」格名詞句と(45b)の「を」格名詞句は同じ位置に生起している、にも拘わらず、「を」格の場合に部分否定の読みはなくなる。これは(35)の場合と全く同じである。また、「を」格であっても非時制節に直すと部分否定の読みが可能となる点でも共通している((37))と比較参照)：

(46) 和子は〔子供に(は)全ての生活上の指導を必要ではなく〕感じた。

(全て>ない, ?ない>全て)

したがって、ECM 構文の「を」格名詞句はもともと埋め込み文の主語であるとする(21)の分析にとって(35)のような事実は問題とはならないということが再度確認できる。

以上本節では、与格構文が一見時制節の T による主格照合の義務性を示しているかのような振る舞いを見せるが、実はそうではなく、与格構文であっても主格照合は決して義務的ではないということを見てきたことになる。

#### 4. 主格照合の義務性・随意性と言語差

本節では、T による主格照合が英語では義務的であるのに対して日本語では随意的であるというここでの主張を更に裏付ける現象について見てみよう。

日本語と英語に上記のような違いがあるとすると、英語では許されない格の交替が日本語では可能であることを予測する。つまり、時制節内の本来主格で実現されるはずの名詞句が主格以外の格で実現されるということが日本語では起こりうる。ECM 構文で見た「が」格から「を」格への交替はその一例であったが、この他、よく知られている「が」格から「の」格への交替もその一例と考えられる：

(47) a. 健太が貰った本はおもしろい。

b. 健太の貰った本はおもしろい。

(47)が示しているように、日本語では名詞を修飾する関係節等に含まれる主格名詞句が属格でも実現しうる。この格の交替は英語では許されない。これは、英語では時制節の T による格照合が義務的であることが一因と考えられる。ただし、(47b)は曖昧で、(47a)と同様に「健太」が本を貰った人である解釈と、本の所有者ではあるが貰ったのは別の人という解釈が可能である。これは(47b)の構造として(48a, b)の両方が可能であることを意味する：

(48) a. [[健太の]<sub>i</sub> [<sub>i</sub> 貰った]本]はおもしろい

b. [[健太の]<sub>i</sub> [pro 貰った]本]はおもしろい

したがって、正確に言えば、英語との相違点は(48a)の構造が可能であることである<sup>15)</sup>。

また、前に見たように日本語は多重主語構文が可能であるが、「が」/「の」交替に関しては次のようなパターンが可能である<sup>16)</sup>。

- (49) a. 和子が数学がよくできることは有名だ。  
 b. 和子の数学がよくできることは有名だ。  
 c. 和子が数学のよくできることは有名だ。  
 d. 和子の数学のよくできることは有名だ。
- (50) a. 和子が性格が悪いことは有名だ。  
 b. 和子の(極めて)性格が悪いことは有名だ。  
 c. 和子が性格の悪いことは有名だ。  
 d. 和子の(極めて)性格の悪いことは有名だ。

(49)は状態動詞「できる」が用いられ主格目的語が可能な場合であり、(50)は2つの名詞句「和子」と「性格」の間に「の」で結ばれる関係が成立している場合である。どちらの場合も「～が～が」の 패턴の他に「～の～が」「～が～の」「～の～の」というパターンが可能である。このうち最後の「～の～の」のパターンが許されるのは時制節のTによる格照合が随意的であるからと考えられる。

以上、日英語の違いの一つとして主格照合の随意性・義務性があることを「が」/「の」交替現象を通して考察した。

## 5. おわりに

本稿では、まず英語に関して、時制節のTによる主格照合が義務的であるという主張を行った。文主語構文は主格名詞句が音形を持った形で現れないために一見問題であるかのように見えるが主格照合はやはり義務的に行われているということを示した。また、日本語の主格照合に関しては、ECM構文を基に随意的であるとする立場と与格主語構文を基に義務的であるとする立場があるが、前者が正しいという結論を導いた。そして更にこの結論は、「が」/「の」交替という英語では許されない格の交替が日本語で可能であることから裏付けられるということを見た。

## 註

\* 本稿は、平成11-12年度文部省科学研究費補助金奨励研究(A)(課題番号11710259)の援助を受けて行った研究の成果の一部である。

<sup>1)</sup> 詳しくは Shibatani (1977) の議論を参照。

<sup>2)</sup> 「やすい」が繰り上げ述語であるということは、単独で目的語を取ることはないということと、無生物主語を取りうること((i)), から明らかである(繰り上げ述語とコントロール述語の区別に関する詳しい議論は影山(1993)を参照)。

(i) [<sub>IP</sub>雨が<sub>i</sub> [<sub>IP</sub>4 降り] やすい]。

cf. \*雨が降り忘れた。

<sup>3)</sup> 対格名詞句の格照合の仕方に関して詳しくは Noji (1997) を参照

<sup>4)</sup> 同じ構造格でも対格の照合は一般に随意的なものである。これは(13a)の文と並んで(i)が可能となることから明らかである：

(i) John considers that he is honest.

- 5) このような分析の問題点に関しては野地(1997)を参照。
- 6) Kuno(1976)は主節動詞の「目的語の位置」を対格名詞句の移動先としているが、Kaneko(1988)は埋め込み文のCPの指定部の位置を移動先とし、そこで主節の動詞により格付与されるとしている。ECM構文の対格名詞句の位置については以下の議論で直接問題となることはないが、ここではKunoの「目的語の位置」をミニマリストの枠組みで「対格照合が行われる位置」即ち「Vの指定部の位置」と解釈することにする。詳しくはNoji(1997)を参照。
- 7) Miharaが実際に用いている例文は(i)である。
- (i) メアリーはジョンを愚かにも天才だと思っていた。  
(22)の「を」を落とした場合「が」格が落ちているという可能性も生ずるが、(i)のように「愚かにも」を入れれば「が」格の可能性はなくなるからである。
- 8) 格助詞の脱落に関して、Kuno(1973), Saito(1983)は「が」は脱落しないが「を」は脱落しうると述べている。しかしながら、Takezawa(1987)が指摘しているように、「が」も与格構文では脱落しうる。与格構文の「が」も構造格と考えられるので(1節の議論を参照)、原則として構造格は脱落しうるが後置詞は脱落しないと言える。しかし、構造格の脱落可能性はかき混ぜ(scrambling)等の移動によっても変わることから、(21)の「を」が脱落しないからといって構造格でないとは言えないであろう。
- 9) 主語を含むこの種の慣用句が全て(30)のように言い換えが可能というわけではない。主語を含む慣用句の数がそもそも少ないのに加え、(30)のような言い換えが可能な慣用句はむしろ稀である。また、当然のことながら、(30)の「を」格名詞句を「が」にした文の方がより自然である。
- 10) ?は(33,34)それぞれに対して次のような表現が存在し、そちらの方が好まれるという意味で付してあるが、原則として可能である(cf. Homma(1998))。
- (i) a. ぼくはどの地域も食べ物がうまいとは思わない。  
b. ぼくはどの学生も性格が悪いとは思わない。
- 11) Aoun(1985)によれば、繰り上げが2つ以上の節境界を越えている(ia)のような文では、(ib)の場合には可能なlikelyがsomeよりも広い作用域をとる解釈がなくなる：
- (i) a. Some politician seems to be likely to address John's constituency.  
b. Some politician is likely to address John's constituency.
- 同様なことが他の言語等でも言えるという。したがってこうした意味でも(36)は必要条件と考えるべきであろう。
- 12) (38a)のような与格主語構文でTが主格名詞句の格照合を行うということは1節で見た通りであるが、ここではUra(2000)に従い(39)のようないわゆる可能文に現われる主格目的語の格照合に関してもTが行うと仮定する(cf. Tada(1992), Koizumi(1994))。
- 13) -(ra)r)eと結び付くのは非能格自動詞に限られる：
- (i) a. \*氷が溶けられた。  
b. \*子供が生まれられた。
- (i)のように非対格動詞が-(ra)r)eと共に複合動詞を形成することはない。
- 14) 「思われている」のように受け身形を用いているのは、(i)のように日本語では長距離格付与(long distance Case-marking)が可能であるからである：
- (i) a. 私は健太が数学が得意ではないと思う。  
b. 私は健太が数学を得意ではないと思う。

cf. \*健太が数学を得意ではない

- <sup>15)</sup> (48b)の「健太」を pro の先行詞として解釈することも可能であり、これは(i)の場合と同様である：
- (i) 健太の彼が買った本はおもしろい。  
この点で(47b)は ECM 構文と対照的である：
- (ii) \*私は健太<sub>i</sub>を彼<sub>i</sub>が天才だと思う。  
仮に ECM 構文が(22)のような構造を持つとしたら(ii)は容認可能なはずである。Kuno (1976)はこの事実を彼の分析((21))の根拠として挙げている。
- <sup>16)</sup> (50b, d)で「極めて」という副詞が挿入されているのは「和子の性格」が名詞句として1構成素を成す解釈を排除するためである。

### 参 考 文 献

- Aoun, Joseph (1985) *A Grammar of Anaphora*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Aoun, Joseph and Yen-hui A. Li (1989) Constituency and scope. *Linguistic Inquiry* 20: 141-72.
- Aoun, Joseph and Yen-hui A. Li (1993) *Syntax of Scope*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Bošković, Željko (1995) Case properties of clauses and the greed principle. *Studia Linguistica* 49: 32-53.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2000) Minimalist inquiries: The framework. In: R.Martin et al. (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, Cambridge, MA.: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2001) Derivation by phase. In M.Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, Cambridge, MA.: MIT Press.
- Homma, Shinsuke (1998) Remarks on the ECM NP in Japanese. *Proceedings of TACL Summer Institute of Linguistics* 1998: 25-36.
- Kaneko, Yoshiaki (1988) On exceptional Case-marking in Japanese and English. *English Linguistics* 5: 271-289.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』東京：ひつじ書房。
- Koizumi, Masatoshi (1994) Nominative objects: the role of TP in Japanese. *MIT Working Papers in Linguistics* 24: *Formal Approaches to Japanese Linguistics I*, 211-230.
- Kuno, Susumu (1976) Subject raising. In: M. Shibatani (ed.) *Japanese Generative Grammar*, 17-49. New York: Academic Press.
- Kuroda, S.-Y. (1988) Whether we agree or not: a comparative syntax of English and Japanese. *Linguisticæ Investigationes* 12-1: 1-47.
- Mihara, Ken-ichi (1994) On the proper treatment of postpositions in Japanese. In: M. Nakamura (ed.) *Current Topics in English and Japanese*, 131-150. Tokyo: Hituzi Syobo.
- Noji, Miyuki (1997) Objective Case checking and parametric variation. *English Linguistics* 14: 129-158.
- 野地美幸 (1997) 「文主語構文と格照合」『英語青年』143:213-216.

- Saito, Mamoru (1983) Case and government in Japanese. *WCCFL* 2: 247-259.
- Shibatani, Masayoshi (1977) Grammatical relations and surface Cases. *Language* 53: 789-809.
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』 東京：大修館。
- Tada, Hiroaki (1992) Nominative objects in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics* 14: 91-108.
- Tateishi, Koichi (1994) *The Syntax of 'Subjects.'* CSLI Publications & Kurosio Publishers.
- Takezawa, Koichi (1987) *A Configurational Approach to Case-Marking in Japanese.* Unpublished doctoral dissertation, University of Washington.
- Takezawa, Koichi (1993) A comparative study of *omoe* and *seem*. In: H. Nakajima and Y. Otsu (eds.) *Argument Structure: Its Syntax and Acquisition*, 75-95. Tokyo: Kaitakusha.
- 竹沢幸一 (1998) 「格の役割と構造」 中右実 (編) 『日英語比較選書 9 : 格と語順と統語構造』 東京：研究社
- Ura, Hiroyuki (2000) *Checking Theory and Grammatical Functions in Universal Grammar*, Oxford: Oxford University Press.

## Nominative Case Checking in Japanese and English: Optional or Obligatory?

Miyuki NOJI\*

### Abstract

The existence of the so-called multiple subject construction in Japanese and the lack of it in English suggests that multiple nominative Case checking is possible in Japanese but not in English (Ura (2000)). The present paper argues that this is not the only difference between the two languages with respect to nominative Case checking and that there is also a difference concerning its optionality/obligatoriness.

Through the discussion of the sentential subject construction, the ECM construction and so on, it is shown that nominative Case checking is obligatory in English. And the examination of Japanese ECM construction reveals that the checking is optional in Japanese. Case alternation possibilities in the dative construction seem to tell otherwise and constitute counter evidence. But this is not problematic at all. Rather, this argument can be given further support from Case alternation phenomena which are allowed in Japanese but not in English.

---

\* Division of Languages: Department of Foreign Languages